

鼠の発生

大村伸一

天井裏に鼠がいた。

部屋の明かりを消して眠ろうとすると天井で何かが慌ただしく動き廻る音が聞こえた。虫であればもっと軽い音がするだろうし、盗賊や忍者であれば天井全体の軋むような音になるはずだ。硬い爪が天井板に当たる音もするが、小さい爪の当たる軽い音だけだから野良猫や野良犬が入り込んだのではありえない。それならば天井裏にいるのは鼠としか考えられないだろう。

鼠は二匹いるらしい。二箇所と同時に足音が聞こえ始めそのまま同じ方向に平行に走り続ける。そうではなく鼠は八匹はいるようだ。天井の四隅と中央それにそのどれとも違う三箇所同時に足音が聞こえ始めそれから天井板を搔き廻り走り回っているからだ。鼠は八匹はいた。もっとたくさんの爪音が天井いっばいに響く夜もあった。何匹いるのかはわからない。

最初は気になったその音も、一週間もしないうちに慣れてしまった。部屋の電気を消して寝床に入り天井裏の物音が始まる。硬く小さな爪が小刻みに天井板に当たり続ける。いずれ爪に削られた天井を鼠たちは突き破って落ちてくるだろう。天井裏の柱をよけ損ねてぶつかり、削り取られた体毛と少しの肉片が柱にこびりついてそのまま乾いてゆく。肉の腐ってゆくにおいは三日めが最も強く一週間もすると何も感じなくなる。

それとも小さな羽虫ほどしかない鼠の群れが天井裏の柱や壁をびっしりと覆い、濡れた鼻と毛先のような舌で木目の隙間を探り続け、天井裏は鼠の唾液の生臭いにおいで充満している。足音しか知らないのにその鼠の一匹一匹の飢えた目やひくひくと食べ物を探しつづける鼻の形やひとつひとつ異なる身体の模様までを覚えていて、音を聞きながらそれを思い出していると決まって気づかない間に眠ってしまう。翌朝目が覚めれば勿論天井では何も音がせず、動物のおいもなかった。それでも、わたしは鼠が存在することを知っていた。

昼間、わたしは鼠の脅威について考えた。鼠の気配のない昼間であれば、落ち着いて考えることができる。もしも鼠がパンツの中に住みついたらどうすればいいだろうか。もしも、わたし

のパンツの中に鼠が住み着いたとしたら、わたしは正気ではいられないだろう。もしもパンツの中の鼠がわたしの性器に噛みつき、齧り、皮膚を食い破り肉や脂肪までを食い続けたとしたら、その痛みにはわたしは耐えられず正気を失ってしまうだろう。だからわたしは鼠がパンツの中に住み着く可能性について鼠の気配のまったくなくなる昼の間考え、身近に存在を感じる夜の間はその想像を一切忘れた。それでもわたしは無意識のうちに姿の見えない鼠に怯えていたのかもしれない。天井裏の音が聞こえ始めて以来、わたしの性器は決して熱くなることがなかった。

昼間のもっぱらの懸案は鼠をすぐにも追い出すべきか、それとも時期を待つべきかということだった。パンツの中に鼠が入り込んでも、はじめの頃はまだ鼠も住み着くかどうか決めかねおそらくパンツの外に餌を探しに出るだろうからその間に、断固としてパンツと太ももやパンツと腹筋の間にある隙間をボロ布で詰め二度と鼠が入り込めないようにすべきだろうか。それとも、わたしのもう二度と熱くならない性器は鼠の好む獲物ではないはずだから、パンツの中の鼠との同居はそれほど恐れることはないのだろうか。鼠に悪意がないならば危害を加えない間は居住を許し、すぐに締め出すのではなくパンツの中の肉体のどこかを一度齧られてから追い出すかどうかを決めればよいのかもしれない。そもそも、もはやわたしの生物的存在価値にとって意味を持たないこの機能を失った性器と、鼠のこれからの生活とを比較するならば、どちらのほうがより重要だといえるだろうか。

パンツの中に入り込んだ鼠という種はよく知られているように多産で、もしもパンツの中に住み着いた個体が特に好色であり食欲の対象としてだけでなく性欲の対象としてわたしを認識したとき、わたしの肉体が鼠の妊娠サイクルに耐えられるものなのかどうかも、考えないわけにはいかなかった。わたしのパンツの中で温められ腹や太ももにできた大きな膨らみは赤く腫れ、時々その中で蠢くものは引っ張られ薄くなった膚の上からも姿を透かして見ることができる。膨らみからは絶えず痒みが生まれ、昼は痛みすら感じたが、強く搔いたり擦ったりすることはできなかつた。手で触れたときに想像する腫れの大きさに対して実際に目にしたその腫れの中身は意外に小さく、皮膚を透かしてみえる透明な身体を持つ稚鼠は、まだ視力のない大きな眼球をくるくると回転させ、自分を守るわたしの膚の外側の世界を心配そうに探っている。腹に三つ、両方の太ももに二つづつある膨らみは、次第に育つ。育つにつれて鼠の子供達の空腹は神経組織の繋がっているわたしにも伝わり、子供達がわたしの身体の脂肪や筋肉組織を齧り咀嚼し始めたとき、わたしはそれを受け入れている自分に気づいても驚きはしなかつた。痒みや痛みはいつのまにか消えていたのに、わたしは消え去った痛みすら懐かしく思い出してもう一度戻って来て欲しいとさえ思った。

小さな羽虫ほどしかない鼠の群れがわたしの腹を内側から食べ続け、濡れた鼻と毛先のように先の細くなった舌がわたしの組織を舐め溶かし消化していった。蜜蜂の羽根の震えるように振動する虫であり鼠であるものの歯は他の歯とこすれ合うと甲高い音を生み出した。音はわたしの膚を震わせわたしの身体全体から元の音とはすこしも似ていない低い振動音が響いた。わたしの横になっているベッドや家具や床や壁までもがその振動に共鳴し部屋全体が何かうなり声をあげているようだった。しかし、それはわたしにしか聞こえなかったのかもしれない。わたしの部屋を訪れる人たちから、その音についての感想や苦情を聞いた事は一度もなかった。

わたしの腹の中で誕生した鼠たちは皮膚を突き破ることなく筋肉と脂肪を食い破り腸をむさぼりその間を満たす液体をすすって大きくなった。太ももで生まれた鼠たちには筋肉と骨しか与えられなかったので粗暴に育ち計画性のない食べ方でふくらはぎから足首のあたりまでを食い尽していった。鼠たちはわたしの身体を食べ、そこにできた隙間に糞を生み続けた。わたしの下半身はそうにして鼠の糞に変わり、おそらくそのために痛みを感じなくなったのだろう。それでもときどき激しい痛みを感じないわけではなかった。たぶんそれは骨を齧られるときの痛みだったのだろうと思う。骨を食べた後、鼠たちはわたしの膚の内側で激しく暴れて外に出ようとしていたように思う。腸を食べて育った鼠たちは足で育った鼠よりも太っていて、少し食べ少し眠り、目覚めるとまた少し食べ少し眠りを繰り返して育ち続けた。

わたしの膚を食い破り外に出たのは足の鼠が先だった。何一つ感覚のなくなった足はもう鼠には食べる場所がなくなり、外に出るしかなかったのだろう。部屋の中に広がった糞のにおいでわたしには鼠たちの出産が分かった。空気をはじめ吸い痛む肺に甲高い叫びを上げ、それから近くにある食べ物を求めて鼻をひくつかせる鼠たちは、わたしの足を離れ床の上にこぼれるように落ちてそこから部屋の中に広がっていった。何匹いたのかは分からない。鼠の足の爪が床に当たるときの小さな音がいつまでも続いていた。わたしの足の膚の内側には鼠の糞が詰まり、その中には食べ残された骨の切れ端がすこしだけまぎれていた。

腹の中で大きく太った鼠たちはなかなか外に出ようとはしなかった。少し食べ少し眠り、目覚めるとあたりを探るように眼球をまわし舌を伸ばした。舌がわたしの内蔵を舐め、すると食欲を思い出すのか、また少し腸を食べ少し眠り、それを繰り返した。わたしによって半ば消化された食物が腸を通して供給されるので、腹にいた鼠たちはあわてて外に出る必要はなかった。食べ続け排泄し続けた鼠の糞はわたしの骨盤の隙間から、すでになくなった太ももへと絞り出されていった。大きく育った三匹の鼠は重く、仰向けに横たわるわたしの背中が

その重みにしびれているのが分かった。腰は鼠たちの揺り籠になっていて、何も感じはしなかったが、鼠たちが寝返りを打つたび、背骨と腰骨の継ぎ目のどこかがこつんこつんと音を立てて、その音だけが部屋に響いた。足の鼠たちが残した糞のにおいには耐えられないと言って、わたしの部屋を誰も訪れなくなってしまい、わたしは食べるものがなくなったが、腹に住む鼠が胃袋を下から圧迫していたからだろう、空腹は少しも感じなかった。ただ、一週間もすると腸から供給されていた餌がなくなり、腹の中の鼠たちが興奮しはじめたのが分かった。大きな身体を育てるために必要な食べ物はもうわたしの体内には残されていなかった。大きく育った鼠たちはわたしの腹の皮膚をこともなげに食い破り外に出て来た。部屋の中にはまだ足から生まれた比較的小さな鼠たちが残っていて、壁紙や床板を齧り続けていたために硬く大きくなった歯で壁や天井や床にたくさんの穴を開け、そこから隣家の庭やずっと下の方の国道を走る車が見えた。腹の鼠は足の鼠の五倍ほどの大きさがあり、足の鼠を追いつめるとその頭から丸呑みにして食べ始めた。

足鼠と腹鼠はこのようにして誕生した。

そして今では、足鼠は何兆匹にも増えて世界を食べ続けている。腹鼠は足鼠を餌食にしていたが食べ尽す事はなかった。足鼠が腹鼠に逆襲することもないではないが腹鼠は餌として旨くはないのだろう、すぐに攻撃をやめて足鼠は他の餌を探し始める。

下半身をなくしてしまったわたしは、糞男と呼ばれ自分の部屋の前で物乞いをしながら世界の終わりを待っていた。

世界の終わりはもうすぐそこにまで近づいていた。